

2020年12月19日(土)

謎の飛鳥時代の瓦群

—那珂遺跡群の調査成果より—



福岡市埋蔵文化財課

中尾 祐太

那珂遺跡群第182次調査の基本データ

場所—博多区竹下4丁目地内

調査期間—令和2年5月11日～9月29日

調査面積—約1500㎡

遺跡の時期—弥生時代(約2000年前)

～平安時代(約1000年前)

主な遺構—竪穴住居、井戸、溝、土坑(瓦廃棄土坑含む)、
掘立柱建物(総柱建物)

出土遺物—弥生時代～古代の土器、古代の瓦(初期瓦)、
陶磁器(越州窯系青磁、邢窯系白磁)

那珂遺跡群の立地と環境

那珂遺跡群が所在する福岡平野は、三郡山地、背振山地等の山塊によって囲まれた小平野である。平野内には那珂川、御笠川が流れており、両河川及びこれらから派生した中小河川の開析作用によって形成された中位段丘面が断続的に連なっている。一帯は花崗岩風化土を基盤としており、その上にはAso-4火砕流堆積物(阿蘇山の火砕流)が堆積している。各段丘には多くの遺跡が点在している。那珂遺跡群が展開する段丘には、五十川遺跡と比恵遺跡群が存在するが、特に比恵遺跡群とは遺跡の展開その他で深い関連性があり、実質は一連の大遺跡群として認識されている。

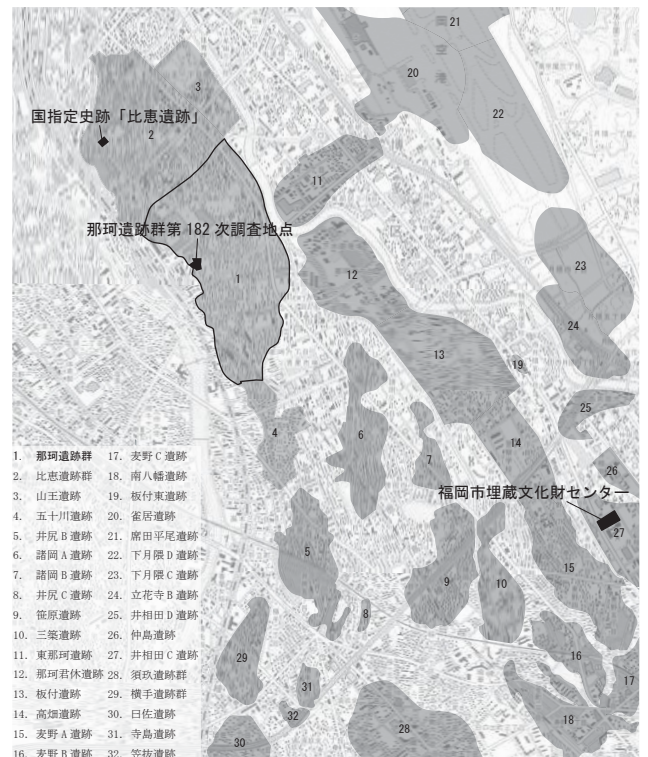


図1 那珂遺跡群の範囲と周辺遺跡の分布(1/50,000)

※ アミが各遺跡の範囲を示す



写真1 調査第1区全景(北西から)

古代的那珂遺跡群

那珂遺跡群における集落のピークは大きく弥生時代中期～古墳時代前期前半と古代に分けることができる。

古代についてみると、比恵遺跡群において「那津官家」との関連が指摘されている6世紀後半の大型の倉庫群が出現した後、那珂遺跡群でも集落が再び拡大すると同時に、遺跡内の各所に掘立柱建物群が建てられる。また、九州最古段階の6世紀末～7世紀代の瓦(初期瓦)が一定のまとまりをもって出土することから、かねてより官衙、寺院等一般的な集落とは性格を異にする施設の存在が指摘されていた。

182次調査地点の北側隣接地で実施された115次の調査報告では、周辺の遺構の分布状況や旧地形から182次調査地点を含む一帯(図2のアミカケ部)に7世紀前後の重要遺構が分布する可能性が指摘されていた(久住編2008)。

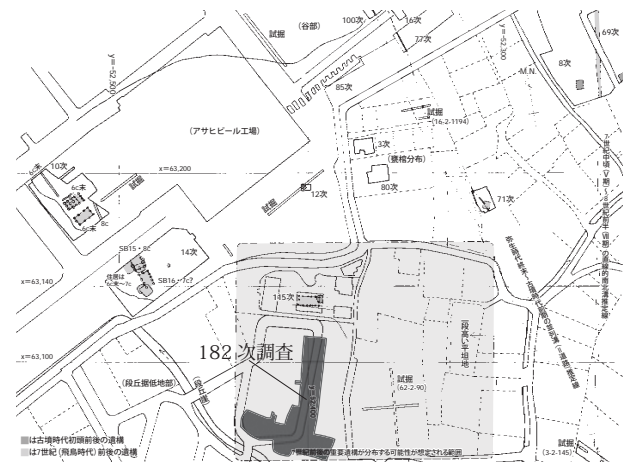


図2 182次調査地点および周辺の調査地点(1/4,000)



写真2 SK008瓦出土状況(東から)



図3 SK008実測図(1/40)

瓦の一括廃棄土坑 SK008・SK011

182次調査地点では、調査地点の南東部を中心として多量の初期瓦が出土した。調査全体でコンテナケース126箱分の遺物が出土しているが、そのうち少なくとも1/4は瓦が占める。

これら瓦の大半は、後の時期の遺構に混入したもので、一つの遺構からは多くても十数点程が出土する程度であるが、ここで取り上げるSK008、SK011からは遺構検出面から底面にいたるまで瓦が敷き詰められたような状態で出土した(写真2・図2・別図)。両遺構の特殊な点は、出土遺物の大半を瓦が占めていることで(SK008で確認できたその他の日常土器は破片が数点のみ)、ここから両遺構が瓦を意図的に廃棄するための遺構であることが分かる。また、遺構の堀方が方形を呈すること、および両者の遺構の主軸が同じであることから計画性の高さがうかがえる。



写真3 182次調査SK008出土軒丸瓦



写真4 182次調査SK011出土軒丸瓦

九州の初期瓦は日本最古級？

日本における本格的な瓦生産は仏教寺院の造営技術とともに百済から伝わった。『日本初期』崇峻天皇元（588）年条には瓦博士4人が渡来し飛鳥寺の建立に携わったことが記されている。九州において本格的な瓦生産が始まるのは7世紀後半以降で、やはり仏教寺院との関連が指摘されている。大宰府政庁、府の大寺である観世音寺に瓦が葺かれるようになるのは8世紀以降で、初期の瓦は福岡市南区の老司窯跡で焼かれたものであることが明らかになっている。

つまり、那珂遺跡群で出土する初期瓦は日本国内でみても最古段階に属する。那珂遺跡群出土瓦も故地は朝鮮半島に求められるが、畿内への造瓦技術の伝来とは異なるルートあったと考えられる。

生産地は須恵器の窯跡

初期瓦の発見は1960年代に遡る。須恵器の一大産地である牛頸窯跡群での発掘調査の結果、須恵器とともに瓦が焼かれていたことが明らかになり、その後の発掘調査でも牛頸窯跡群内での瓦生産が追認された。那珂遺跡群では1980年以降、初期瓦の発見が相次ぎ、23次調査では生産地である月ノ浦窯跡出土軒丸瓦と同じ型を用いて作られたとされる瓦も出土し、両遺跡間における生産地（牛頸窯跡群）と供給地（那珂遺跡群）の関係が認識されるようになった。

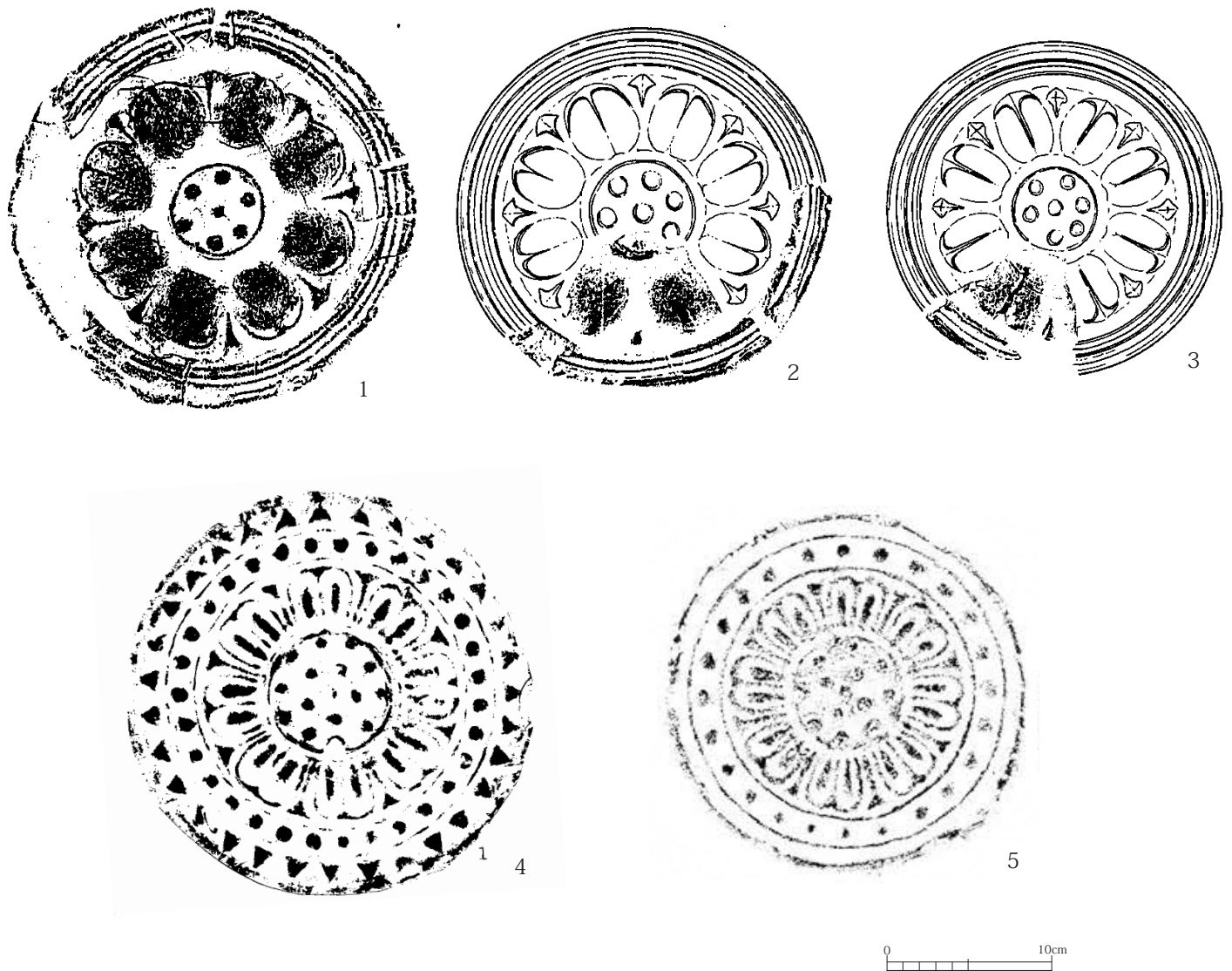


図4 7世紀後半以降の軒丸瓦（1/4）

1～3：那珂遺跡群出土 4：三宅廃寺出土 5：鴻臚館出土

多彩な軒丸瓦

182次調査地点からは多様な軒丸瓦が出土している。写真5の瓦は瓦当に文様がない瓦で、生産地遺跡である「神ノ前窯跡」出土軒丸瓦（図5）と同タイプと考えられる。神ノ前タイプと呼称されるこの瓦は粘土紐を巻き上げてロクロ成形し、外面にはタタキ目やハケ目が残る。これは須恵器の製作技法に通底するものである。

182次調査地点出土のものも同様の技法で作られており、外面を板状の工具で強くナデて仕上げている。この瓦は周辺の調査地点でも出土している。



写真5 無文軒丸瓦 182次調査SK008出土

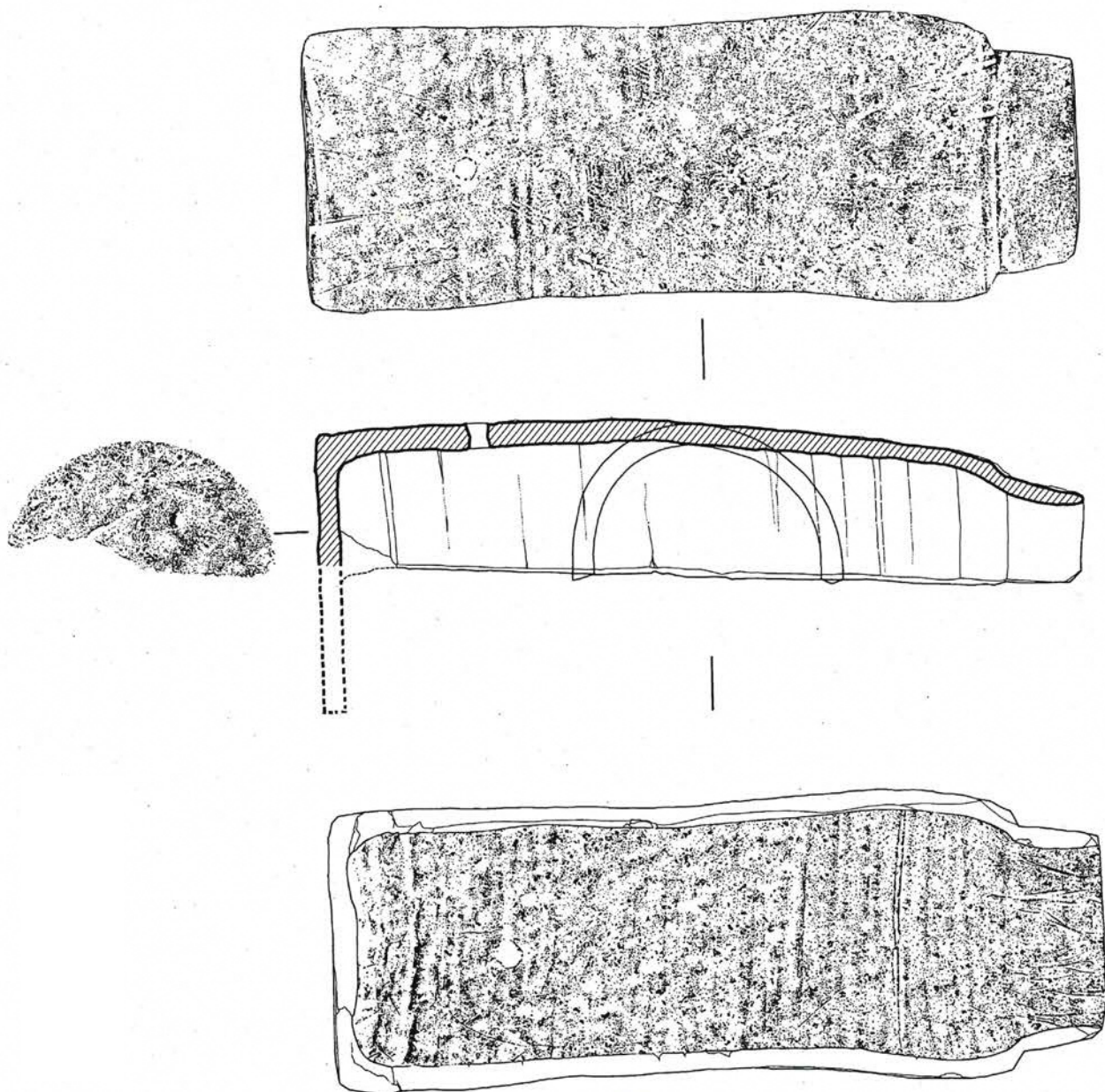


図5 無文軒丸瓦実測図（1/3） 神ノ前2号窯跡出土

瓦当に文様を施すタイプで、須恵器生産との関連性がうかがえるものに写真6の瓦がある。7世紀後半以降の瓦がそうであるように初期瓦も基本的に蓮華文を意識して施文していることが読み取れるが、本資料は花卉、中房部分を同心円の文様で表現している。この文様は図6のように須恵器甕などの内側に多くみられる文様で、成形時、器壁を叩き締める際に内側を当て具でおさえる際につくものである。瓦に残る同心円文の当て具痕は牛頸瓦窯跡出土の平瓦の凹面からも確認されているが、それはあくまで成形における叩き締め工程でつく副次的なものである。本資料に関しては単に文様を表すために当て具を使用している点が特徴的である。

須恵器には坯の外底面等に「ヘラ記号」とよばれる線刻が施されていることがよくあるが(図7)、写真7の瓦にも同様の線刻が認められる。両者に関係性があるのかは不明だが、興味深い例である。なお、この瓦は表の文様表現も線刻によって表されている。



写真6 軒丸瓦(当て具による施文)
182次調査地点SK008出土

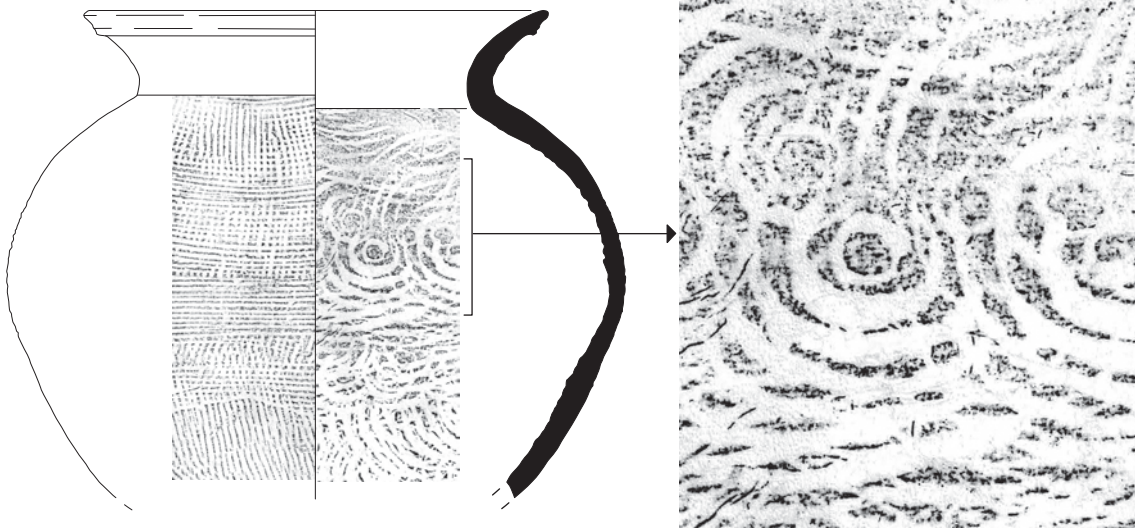


図6 須恵器に残る当て具痕(1/3・1/1) 井相田C遺跡出土

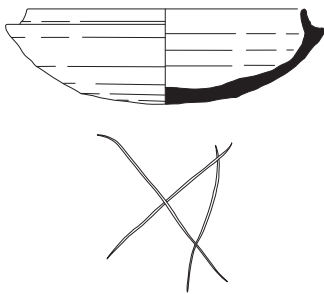


図7 ヘラ記号が残る須恵器(1/3)
井相田C遺跡出土

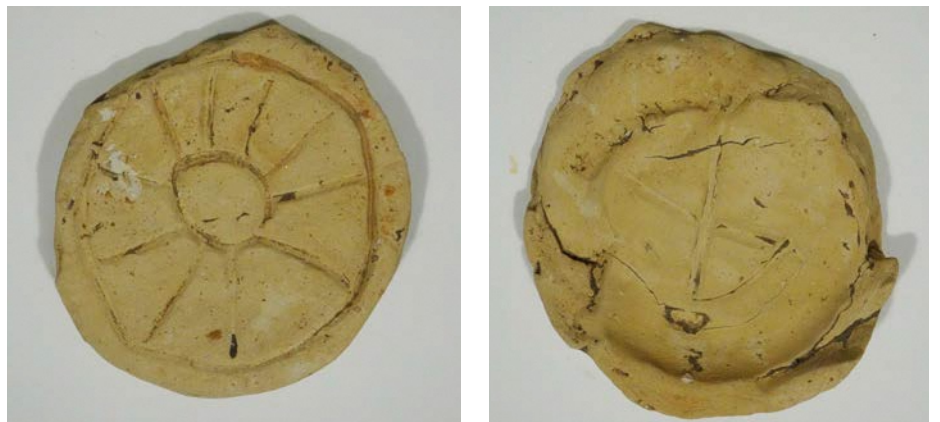


写真7 軒丸瓦(線刻による施文)
那珂遺跡群182次調査出土



写真8 軒丸瓦（範による施文）
那珂遺跡群 182 次調査出土

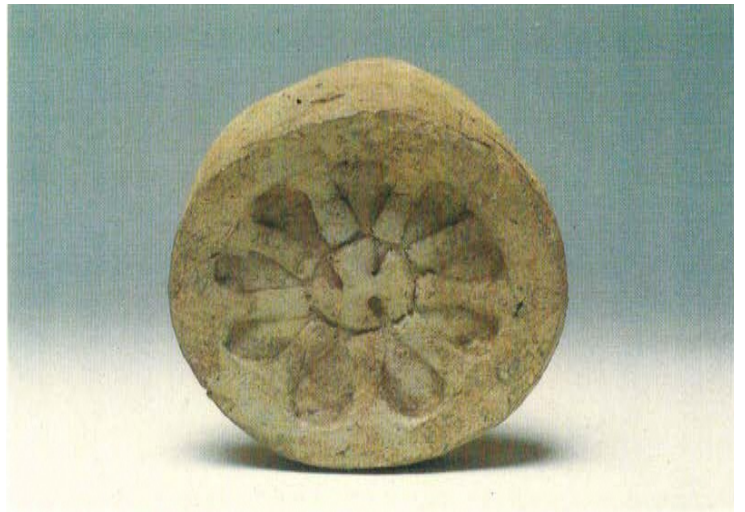


写真9 月ノ浦窯跡出土軒丸瓦
月ノ浦 1 号窯跡出土



写真10 同タイプの軒丸瓦（範による施文） 那珂遺跡群 182 次調査出土

範を用いて施文されたものも多く、うち1点は通称「月ノ浦タイプ」と呼称される月ノ浦窯出土瓦とよく似ている（写真8）。月ノ浦窯跡出土のもの（写真9）も稚拙と表現されるが、本遺跡出土のものはさらに雑な印象を受ける。

写真10はSK008・011から出土した瓦であるが、バラエティに富む初期瓦の中で唯一同タイプでまとまりをもつ例である。断面の観察から範を用いて施文されていると判断したが、雑で一見細い粘土紐を貼り付けて文様を表しているようにみえる。

写真11は線刻によるが、残存部から推定して花卉の先端が尖るタイプと考えられる。このような特徴をもつ瓦は4～5世紀の高句麗に源流が求められており、その影響を受けた新羅で6世紀～7世紀に流行するとされている（比嘉2013）。



写真11 軒丸瓦（線刻による施文・蓮弁の先端が尖るタイプ）
那珂遺跡群 182 次調査出土

時代を超えた瓦

ここで挙げた瓦は、生産地での須恵器の特徴から少なからず時期差があることもわかっている。たとえば、写真5の「神ノ前タイプ」と、写真9(8)の「月ノ浦タイプ」の瓦は生産地での須恵器の形式から神ノ前タイプが古いとされており、また、供給地である那珂遺跡群でも他の遺物との相伴関係から神の前タイプが6世紀末～7世紀初頭、月ノ浦タイプが7世紀前半～中頃とされている(菅波1994)。さらに神ノ前タイプが出土したSK008からは須恵器等の日常土器が出土したが、8世紀代と考えられるものも出土している。仮にこの遺物の時期を廃棄年代と考えると、神の前タイプの瓦は作られてから埋没するまでに約100年以上の時を超えていることになる(ただし8世紀の遺物は検出面～最上層掘削時に出土しており、混入の可能性も十分考えられる。SK008の時期については今後の資料の精査によって決定する。)

実は、瓦は再利用されることもしばしばで、上記の瓦も葺き替えの結果後世まで残ったものと考えられる。SK008出土瓦は約百数十年の間に何棟の軒を飾ったのだろうか。

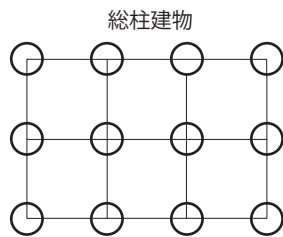
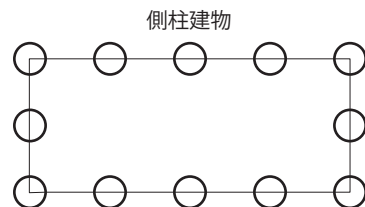
瓦が葺かれた建物は？

ではこれらの瓦はどんな建물에 葺かれていたのか。通常の集落にあるような竪穴建物ではないだろう。那珂遺跡群では遺跡西側を中心に6世紀～7世紀の掘立柱建物(側柱建物・総柱建物)が複数確認されている他、大型の方形区画等もみつかり、これらに葺かれた蓋然性が高い。

掘立柱建物群の性格

市内の遺跡をみると、6世紀～7世紀にかけて那珂遺跡群の北側に接する博多区比恵遺跡群と早良区の有田遺跡群では三重の柵列を伴う大型の総柱建物群(倉庫群)が確認されており、日本書紀にある「那津官家」に関連する建物群と推定されている。特に比恵遺跡群との位置関係からみれば那珂遺跡群における上記の建物群もこれらに相当する可能性が考えられる。

畿内では6世紀末の瓦出現以降、しばらくは寺院建築のみに瓦が用いられており、寺院以外の瓦葺き建物の出現は7世紀末の藤原宮をまたなければならぬ。那珂遺跡群に存在した瓦葺きの建物が仮に官衙施設であれば、その点でも極めて特異である。



○・・・柱

図8 掘立柱建物の模式図

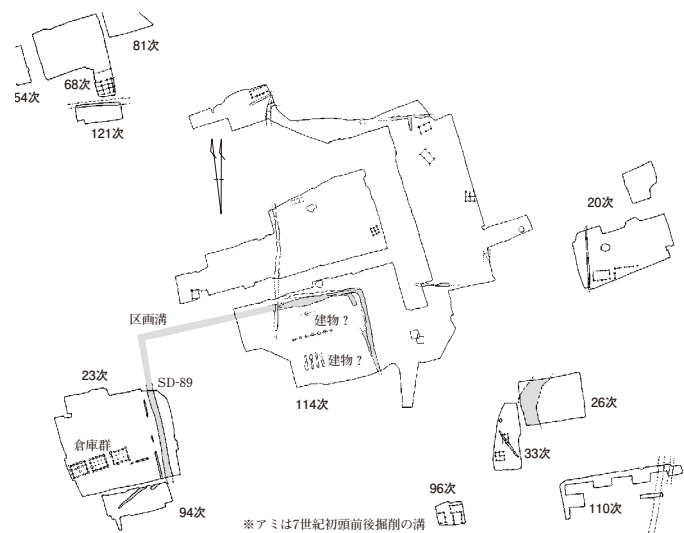


図9 那珂遺跡群の7世紀の溝・建物群 (1/3,000)

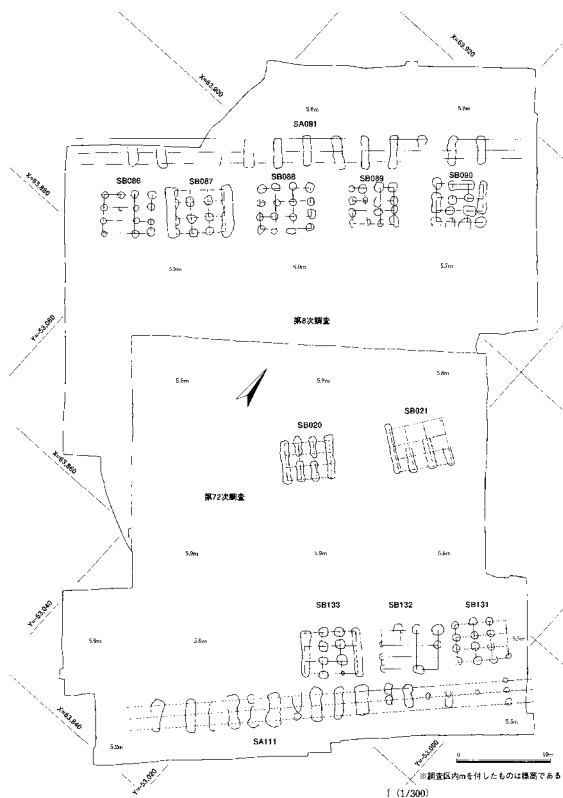


図10 比恵遺跡群8次・72次の柵・建物群 (1/800)



写真 11 掘立柱建物（総柱建物）SB006 検出状況（南から）
那珂遺跡群 182 次調査

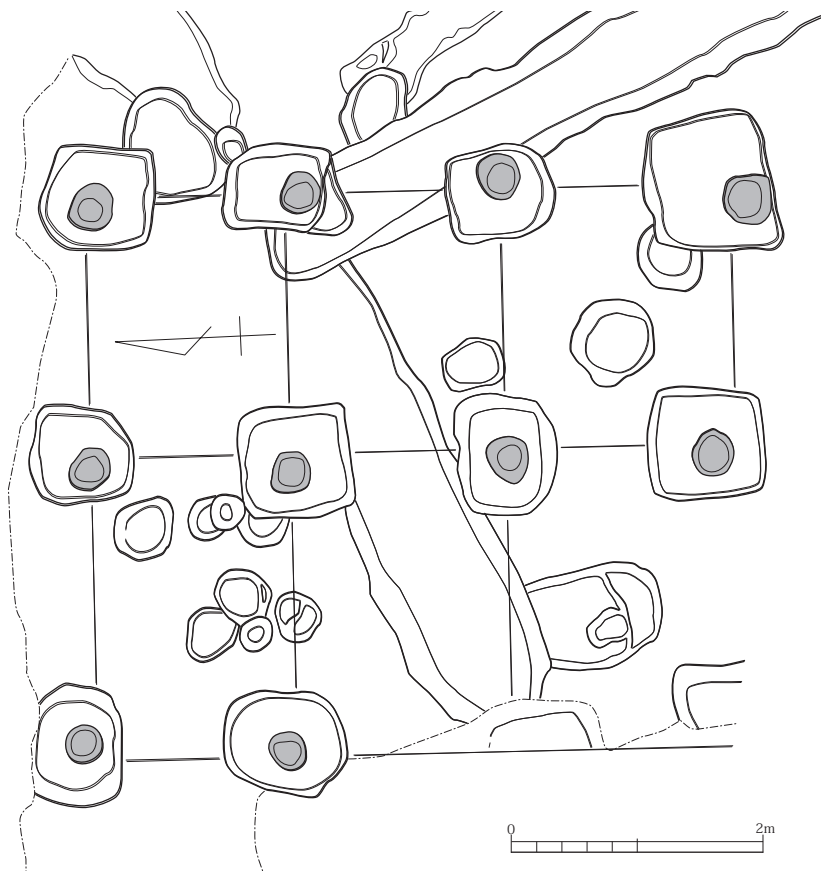


図 12 掘立柱建物（総柱建物）SB006 実測図（1/60）
那珂遺跡群 182 次調査



写真 12 SP0031（SB006 の柱穴）土層断面
那珂遺跡群 182 次調査

総柱建物 SB006

総柱建物は 182 次調査地点でも確認されている（写真 11・図 12）。瓦の一括廃棄土坑の西側隣接地で検出した。2 間×3 間分を確認している。柱堀方（柱を立てるために掘った穴）の形状は比較的整った方形を呈し、そのほとんどに柱の痕跡（図のアミカケは柱）が残っている。

柱堀方内には初期瓦が多数含まれていることから、建物を建てる段階で周辺に瓦があったことは確かである。遺物の精査を行っていない現段階ではこの建物に瓦が葺かれていたかは不明だが、瓦葺きであっても不思議ではない。

継続した拠点性？

182次調査地点で検出した古代の遺構のうち、ある程度まとまった数が確認できたのは7世紀～8世紀前半である。それ以降の確実な遺構は、調査中に確認した限りでは極めて少ない。うち1基が井戸SE002である。9世紀～10世紀前後の遺構と考えられるが、埋土中から多数の遺物が出土した(写真13)。その中から1点磁器碗が出土した(写真14・15)。唐代の「邢窯系」白磁である。

福岡は博多区博多遺跡群でこうした陶磁器が多量に出土することから貿易の拠点であったとされており、周辺においても陶磁器が少なからず出土する。しかし、それは11世紀以降のことであり、これをさかのぼる陶磁器は稀で、市内では鴻臚館等を除けば基本的に出土することはない。別の遺構からはこの白磁からやや下る時期の「越州窯系」青磁も出土した。この時期も一帯に重要施設が広がっていた可能性がある。



写真13 井戸SE02 遺物出土状況
那珂遺跡群 182次調査



写真14・15 井戸SE002 出土邢窯系白磁碗
那珂遺跡群 182次調査出土

那珂遺跡群もう一つのピーク / 弥生時代～古墳時代前期

はじめに記述したとおり、那珂遺跡群は弥生時代～古墳時代前期にも一つの盛期があり、182次調査地点でも多くの遺構、遺物を確認している。特筆すべき遺物として土坑(?)出土の小銅鐸が挙げられる。市内では9例目の発見である。ほぼ完形で、「舌」が残存していることも明らかになった(写真16・17)。この他、小穴からは青銅製の鋤先も出土している。

当該期の遺構としては弥生時代終末期～古墳時代前期に位置づけられる竪穴住居が最も多いが、そのほとんどの埋土に炭や焼土が混入している他、床面直上で炭化した建築部材とみられるも確認している。何らかの理由で焼失して廃絶したものと考えられるが、どのような背景があるのだろうか。

なお、焼失住居は発掘調査時には残ることがない建物の上屋構造を推定するにあたって重要な資料となる。



写真16 小銅鐸出土状況
那珂遺跡群 182次調査

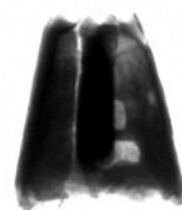


写真17 X線写真

まとめにかえて

那珂遺跡群での発掘調査数は182件が行われており、市内の遺跡でも3番目に多い。すでに古代の那珂遺跡群の重要性が認識されていたのも、これまでの調査・研究の蓄積の結果に拠るところが大きい。今回の調査は大規模なものではあったが、遺跡の総体からみればごくわずかで1%にも満たないだろう。その中で、初期瓦の一括廃棄土坑がはじめて確認され、初期瓦そのものについてもこれまでに確認されていないものが複数出土した。古代の瓦研究はもちろん、古代の那珂遺跡群及びそれをとりまく九州・列島規模の歴史研究に大いに寄与するものと考えられる。

なお、本報告は調査速報のため、今後の資料精査の結果、報告の内容や遺構の時期比定等に変更が生じることがある。

参考文献

(論文等)

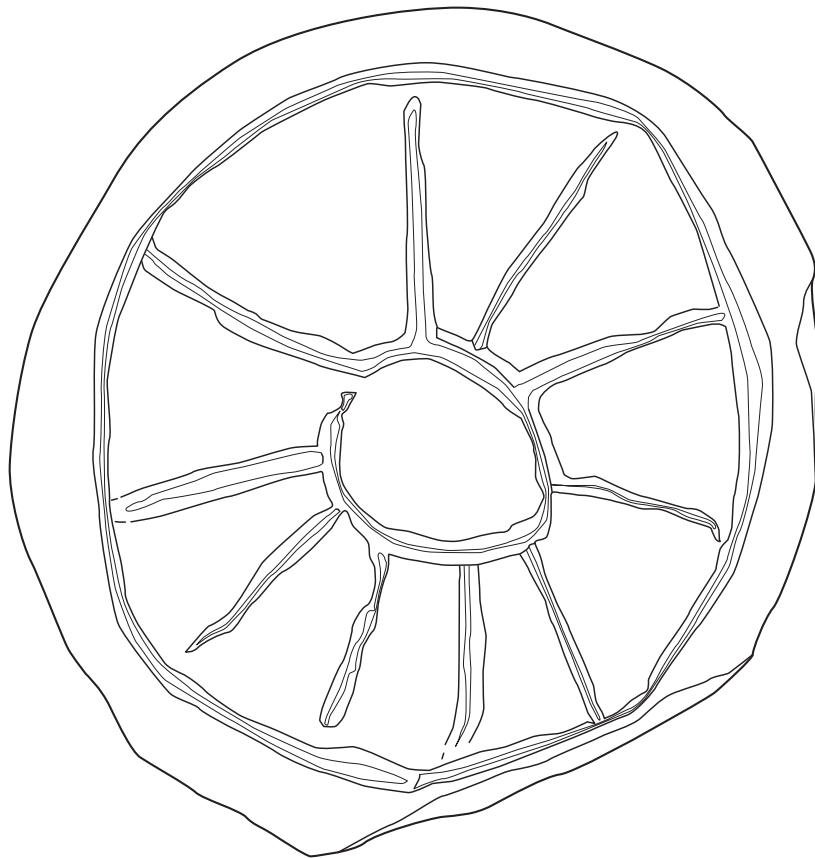
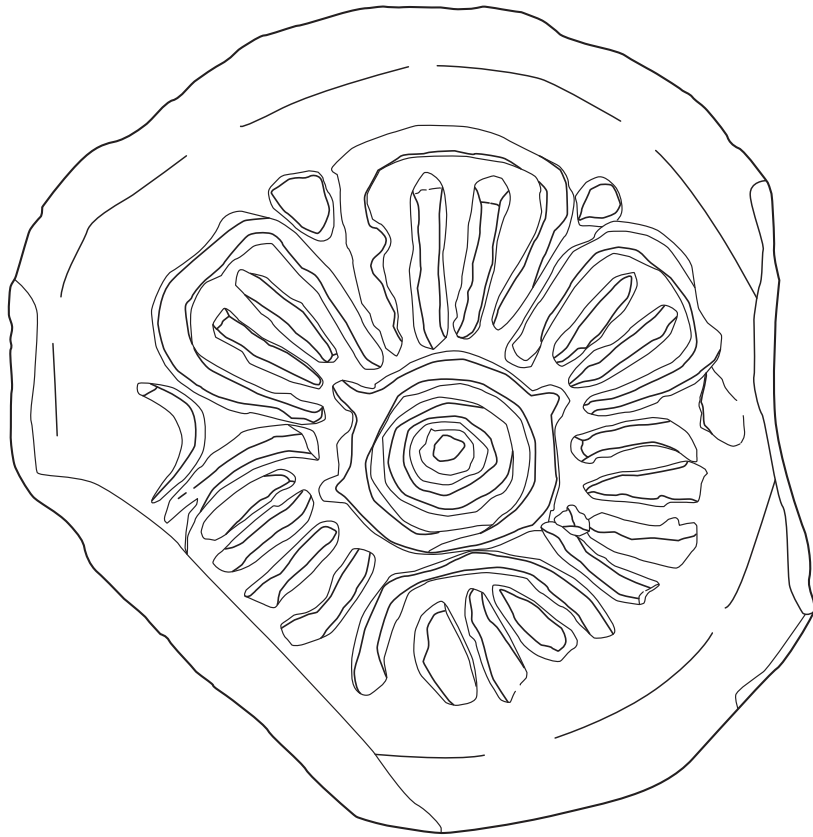
- 石松好雄・舟山良一 1983 「瓦」『月ノ浦窯の小型瓦』『古代研究』25・26 元興寺文化財研究所
上原真人編 1997 『瓦を読む』歴史発掘11 講談社
岡田 裕之 2003 「北部九州における初期瓦生産と須恵器生産」『九州と東アジアの考古学 九州大学考古学研究室50周年記念論文集』九州大学考古学研修室50周年記念論文集刊行会
菅波 正人 1994 「2. 那珂遺跡群出土の古瓦について」『那珂10』福岡市埋蔵文化財調査報告書第365集
比嘉えりか 2008 「初期瓦研究の現状と課題」『七隈史学』9 七隈史学会
比嘉えりか 2013 「福岡市那珂遺跡群出土古瓦の検討」『福岡大学考古学論集2ー考古学研究室開設25周年記念ー』福岡大学考古学研究室

(報告書)

- 荒牧宏行編 1991 『那珂3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第253集 福岡市教育委員会
久住猛雄編 2008 『那珂50』福岡市埋蔵文化財調査報告書第983集 福岡市教育委員会
酒井仁夫・高橋章 1979 『神ノ前窯跡』太宰府町文化財調査報告書第2集 太宰府町教育委員会
杉山富雄・小畑弘己編 1990 『那珂2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第222集 福岡市教育委員会
下村 智編 1991・1992 『那珂4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第253・290集 福岡市教育委員会
菅波正人編 1994 『那珂10』福岡市埋蔵文化財調査報告書第365集 福岡市教育委員会
菅波正人編 2019 『史跡 鴻臚館跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1383集 福岡市教育委員会
中尾祐太編 2016 『井相田C遺跡11』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1277集 福岡市教育委員会
長家 伸編 2001 『比恵29』福岡市埋蔵文化財調査報告書第663集 福岡市教育委員会
二宮忠司編 1979 『三宅廃寺』福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集 福岡市教育委員会
舟山良一編 1993 『牛頸月ノ浦窯跡群』大野城市文化財調査報告書第39集 大野城市教育委員会
吉武 学編 2010 『那珂56』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1082集 福岡市教育委員会

図・写真の出典

- 図1 国土地理院発行1/25,000地形図に加筆
図2 福岡市埋蔵文化財調査報告書第983集(縮尺変更)
図3・8・12・別図 報告者作成
図4 1～3: 福岡市埋蔵文化財調査報告書第222集(縮尺変更)
4: 福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集(縮尺変更)
5: 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1383集(縮尺変更)
図5 太宰府町文化財調査報告書第2集(転載)
図6 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1277集(加筆・修正)
図7 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1277集(転載)
図9 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1082集(縮尺変更)
図10 福岡市埋蔵文化財調査報告書第663集(縮尺変更)
- 写真1～8・10～15 報告者撮影
写真9 大野城市文化財調査報告書第39集(転載)
写真10 上角智希撮影



埋蔵文化財センター考古学講座—発掘調査速報編—

謎の飛鳥時代の瓦群

—那珂遺跡群の調査成果より—



別図 那珂遺跡群第182次調査遺構配置図 (1/200)